

メタファーの身体的基盤について

鍋島弘治朗

関西大学

〒564-8680 吹田市山手町 3 - 3 - 35

Abstract

In this paper, I will discuss the relationship between bases of metaphor and the body in the theory of cognitive linguistics. In addition to co-occurrence as the grounding of metaphor, I will argue that there are two more ways of grounding metaphor: grounding based on structural, image-schematic similarity and that based on evaluative similarity. It is further argued that these two new groundings are also formed through our bodily experience in the world.

1. はじめに

本稿では、Lakoff and Johnson (1980)、“*Metaphors We Live By*”(MWLBy)のメタファー理論と認知言語学の枠組みに基づいたその後のメタファー研究における身体性を取り上げる。MWLByでは、メタファーの身体的基盤として経験的基盤(共起性に基づくメトニミー的認知)が述べられているが、本稿では、これに加えて、イメージ・スキーマに基づいている場合(構造的類似性に基づくメタファー的認知)および、価値評価が関わる場合(カテゴリーに基づくシネクドキー的認知)が存在することを主張し、いずれの場合も身体性に根ざしていることを検証する。

2. MWLByのメタファー理論

MWLByは、メタファーを表層レベルの言語的現象でなく、思考と概念を特徴づける認知的な現象と位置付け、従来の客観主義的な言語観を前提とする言語学研究を根底から批判した注目すべき研究である。

同書は、人間の思考体系がいかに比喻によって特徴づけられているかを、豊富な言語データで実証している。例えば、(1)に挙げるような言語表現を見ると、理論に関して建物の用語が繰り返し用いられていることがわかる。

- (1) a. Is that the *foundation* for your theory?
b. The argument is *shaky*.
c. The argument will *fall apart*.
d. The *framework* of the theory

すなわち、*foundation* (基礎)、*shaky* (揺れる)、*fall apart* (崩れる)、*framework* (枠組み)などの用語は、「建物」から「理論」へ多義を示している。また、(2)のような知識(推論)も援用されている。

- (2) a. 土台が不十分では高い建物は建てられない
b. 上層が壊れても土台が崩れるとは限らない
c. 激しい揺れは建物が崩れる危険性を示す

以下に、MWLByの基本的枠組みを整理する。

- ・ **定義**：メタファーとは領域間の写像である。
- ・ **表記**：THEORIES ARE BUILDINGS/Theories Are Buildings (<理論は建物である>)
- ・ **写像**：語彙や推論などに、要素、関係、構造の対応関係があること
- ・ **領域**：この例における「理論」および「建物」
- ・ **Source Domain (モト領域)**：この例における「建物」
- ・ **Target Domain (サキ領域)**：この例における「理論」領域とは何か、MWLByでは詳しく説明されていないが、認知領域という形でLangacker (Langacker 1987)、フレームという名称の下にFillmore (Fillmore 1982)、

ICM(理想認知化モデル)の名でLakoff(Lakoff 1987)が、ゲシュタルト的な知識構造の明確化を図っている。

Clausner and Croft (1999) は、概念は単独で存在するのではなく、前提 / 背景となる知識構造の中で規定され、このことは認知意味論の研究者の間で合意されていると主張しており、この前提 / 背景となる知識構造を「領域」と呼ぶことが提案している。また、「領域とは認知領域、フレーム、ICM を含む概念として統合的に扱うべき」という立場を取る。本稿でも、Clausner and Croft (1999)に習い、領域、フレーム、認知領域という用語を**ゲシュタルト性**と**局所性**を持つ「知識の塊」という意味で、領域として統一的に理解する。

なお、「ゲシュタルト性」とは、特定の概念や知識はグループをなしており、全体の想起なしに一部だけ想起できないという意味で使用している。例えば、Langacker (1987)に指摘されるように、英語の *arc* で示される概念は、必ず、*circle* の概念を前提とする。また、*spoke* という語で示される概念は、必ず *tire* という語で示される概念を前提としている、ということである。

また、「局所性」とは、人間の知識の想起には容量的な限界があり、一時に想起される知識には制限がある、という意味で使用する。例えば、*spoke* という用語から *tire* や *bicycle* までは同時に想起できても、自転車に乗ってサイクリングしている状況や、製造工場で自転車を生産している状況までは一度に想起できないであろう。

Fillmore(1982)のフレーム理論では、以下のような例を取り上げている。

- (3) a. buy, sell, pay, spend, cost, charge
b. week-end
c. land と ground
d. coast と shore
e. stingy と thrifty

(3a)では *buy, sell, pay, spend, cost, charge* という用語に関して、格関係がすべて異なるものの、それぞれ、いわば商取引フレームという金銭の介した売買の知

識フレームを共有していることが述べられている。このようなフレームが存在するのは動詞に限らない。(3b)の *week-end*の例では、この語が、1週間という用語、および1週間の中に2日休みがあるという知識(フレーム)を前提とすることが述べられている。(3c) の *land* と *ground* の例ではほぼ同一の指示対象をもちながら、前者は海から見た視点、後者は上空から見た視点として視点によってフレーム化が異なる。(3d) の *coast* と *shore*の例も視点の例で、前者は陸から、後者は海からの視点である。最後の (3e) *stingy* と *thrifty* の例は、同じようにお金を使わないという意味の形容詞でも、それが悪いことであるという信念に裏付けられたものが *stingy*、逆にそれがよいことであるという信念に裏付けられたものが *thrifty* で、どちらもフレームは同じだがそのフレームに付与される価値評価が異なる。

3 .メタファーの動機づけと共起性に基づくメタファー

メタファーの重要な概念として動機づけがある。動機づけとは、従来のメタファー理論で根拠 (Grounding) と呼ばれるものであり、MWLByでは、メタファーの動機づけは経験的基盤であるとして、(4)のように記されている。

(4) We feel that no metaphor can ever be comprehended or even adequately represented independently of its experiential basis...(Lakoff and Johnson 1980:19)
ちなみに経験的基盤とは、モト領域とサキ領域が共起する状態を実際に体験すること、概して言えば共起的体験であり、以下のような例が挙げられる。

- 本の数が多ければ高く積みあがる (More Is Up)
- 意識のある時は立って行動する (Conscious Is Up)
- 視覚情報から物事を理解する (Knowing Is Seeing)
- 目的を達成するために移動する (Achieving a Purpose is Reaching a Destination)

親の抱擁による温もりの中で愛情を感じて育つ (Affection is Warmth)

そこでメタファーの経験的基盤(動機づけ)に関して以下のように述べるができる。

・**メタファーの動機づけ**：メタファーの動機づけとは、モト領域とサキ領域との共起経験である。

4. イメージ・スキーマを動機づけとするメタファー

ところが、メタファーは共起性の基づくものだけではないように思われる。メタファーに関する重要な概念としてイメージ・スキーマ(以下IS)がある。ISとは、Lakoff (1987)における *Over* の研究を起点として現在注目されるトポロジ的構造である。容器のIS、Source-Path-Goal (経路・線)のIS、リンクのIS、部分・全体のIS、バランスのISなどがJohnson (1987)に挙げられている。ISに関しては、Gibbs (1995)に興味深い分析と心理学からの研究紹介がある。ISに関する主要な見解を参考に挙げる。

4.1 Johnson (1987)におけるIS

Johnson (1987: 19-)では<容器>のスキーマを例に以下の特徴を述べている。

- (i) 容器は外部からの力を遮断または和らげる。
- (ii) 容器は内部からの力が外部に出ることを妨げる。
- (iii) 容器の中の中ものは比較的位置が変わらない。
- (iv) 容器の中の中ものは内部のものには見やすく、外部のものには見にくい。
- (v) 容器には推移性が働く(例えば、鞆の中にある財布の中の硬貨は必ず鞆の中にある)。

また、ISの例として以下を挙げている。

CONTAINER BALANCE COMPULSION
BLOCKAGE COUNTERFORCE RESTRAINT REMOVAL
ENABLEMENT ATTRACTION MASS-COUNT
PATH LINK CENTER-PERIPHERY
CYCLE NEAR-FAR SCALE
PART-WHOLE MERGING SPLITTING
FULL-EMPTY MATCHING SUPERIMPOSITION
ITERATION CONTACT PROCESS
SURFACE OBJECT COLLECTION

4.2 Lakoff (1987)におけるIS

Lakoff (1987)では以下のように述べている。

Image schemas are relatively simple structures that constantly recur in our everyday bodily experience: CONTAINERS, PATHS, LINKS, FORCES, BALANCE, and in various orientations and relations: UP-DOWN, FRONT-BACK, PART-WHOLE, CENTER-PERIPHERY, etc.

Lakoff (1987: 267)

The term image is not intended here to be limited to visual images. (ibid: 444)

Image schemas can be visualized or drawn only by making them overly specific. (ibid: 453)

4.3 Turner (1991)におけるイメージ・スキーマ

Turner (1991)では、「松の匂い」のISも存在する、など、JohnsonのISよりも広義に捉えられている。しかし、ISの特徴に関する以下の記述はJohnsonの狭義のISに関しても当てはまる。

ISの諸相 (Turner, 1991: 176-177:数字は筆者)

- (i) Absolute size is unimportant for image-schemas.
- (ii) Movements count.
- (iii) Number of entities counts.
- (iv) Interiors, exteriors, centers, and boundaries count.
- (v) Connectedness of the image counts, as does continuity. Degree of curvature counts, but only in rough fashion.
- (vi) Various image-schematic relations (reflexivity, symmetry, and transitivity) count.
- (vii) Certain order relations count.

4.4 Clausner and Croft(1999)におけるIS

Clausner and Croft (1999)では、Johnson(1987)のISを以下のように分類している。

SPACE の類 : UP-DOWN, FRONT-BACK, LEFT-RIGHT, NEAR-FAR, CENTER-PERIPHERY, CONTACT

SCALE の類 : PATH

CONTAINER の類 : CONTAINMENT, IN-OUT, SURFACE, FULL-EMPTY, CONTENT

FORCE の類 : BALANCE, COUNTERFORCE, COMPULSION, RESTRAINT REMOVAL, ENABLEMENT, BLOCKAGE, DIVERSION, ATTRACTION

UNITY/MULTIPLICITY の類 : MERGING, COLLECTION, SPLITTING, ITERATION, PART-WHOLE, MASS-COUNT, LINK

IDENTITY の類 : MATCHING, SUPERIMPOSITION

EXISTENCE の類 : BOUNDED SPACE, CYCLE, OBJECT, PROCESS

4.5 IS とメタファー

Lakoff は、Lakoff (1990) の不変性仮説 (5a) で、IS (以下、IS) をメタファー理論に導入し、Lakoff (1993) でこれを修正、不変性原理 (5a,b) とした。

- (5) a. Metaphorical mappings preserve the cognitive topology (that is, the image-schema structure) of the source domain,
b. in a way consistent with the inherent structure of the target domain.

(5a) では、メタファーは IS を写像する、されているが、IS 自体がメタファーの動機づけになるとは記述されていない。しかし、以下に見るように IS がメタファー動機づけとなると思われる例が存在する。

水のメタファー (Nomura 1996, 野村2002, 鍋島2000)

日本語において言葉や感情を流体として捉える場合が多いことは過去に述べられており、日英での言語のとらえかたの文化的相違に関しては 野村 (2002) に詳しいが、鍋島 (2000) では、水をモト領域とした¹メタファーとしてその他に金があることを特定している。

感情は水である

¹ モト領域が流体なのか液体なのか水なのかも重要な問題ではあるがここでは問わない。

- (6) a. 勇気がほとばしる
b. 不満がどろどろと渦巻く
c. 幸福感に浸る

言葉は水である

- (7) a. 言葉が溢れる
b. 卑猥な言葉を撒き散らす
c. 言葉の洪水
d. 立て板に水のようにぺらぺらと話す

金は水である

- (8) a. 金が溢れる
b. 金をためる
c. 金を搾り出す
d. 湯水のように金を使う

さらに、群集も水のように捉えられる場合がある。

群集は水である (Lakoff 1987, 山梨 2000 も参照)

- (9) a. They flooded into the room.
b. 甲子園に行く人の流れが続いている。
c. ホールはファンで溢れ返っている。
d. 人海戦術
e. 陽子は人波に飲まれていった

これらはすべてメタファーであると考えられる。感情や言葉の場合には、人間の体の多くが水からできており、感情的になると涙や鼻水がでることなどから共起性による動機づけがあると考えられるが、金や群集の場合、このような共起性による動機づけは存在しない。この場合、MASS のイメージ・スキーマ自体が両者の類似性をつなぐ動機づけとなっていると考えられる。また、(10) のような表現もその様態がイメージ・スキーマ的な類似性を持っているためと理解できる。

(10) テロリストは五月雨式に入ってきた

ここまで、いわゆる共起性による経験的動機づけがなくともイメージ・スキーマ自体が経験的動機づけになると思われる例を見た。これらに対する可能な反論としては、(9) のような表現はイメージ・メタファーである、というものである。イメージ・メタファーとは、Lakoff (1993: 229) に述べられた(11)の例に見られるように、視覚的な

類似性をもとにして行われる一度きりの(one-shot)メタファーであるとして、言語的メタファーとは区別されている。

(11) My wife... whose waist is an hourglass.

しかしながら、群集の場合でも上に見たように繰り返しさまざまな形で表現が存在するところから、一度きりのメタファーという記述からは程遠い。また、金の場合には、抽象的な概念であり、政治資金の流れ、などといった場合にサキ領域に視覚的な構造がメタファー写像の前に存在するとは考えがたい。このようなことから、上述の金、群集の例はイメージ・メタファーではないと考えられ、ISが動機づけとなっていることが想定できる。

人生のメタファー(Lakoff and Turner 1989)

Lakoff and Turner(1989)には、さまざまな人生のメタファーが登場するが、これらを並べてみると共通性が見られる。

- (12) a. LIFE IS A JOURNEY
出発 - 到着
b. PEOPLE ARE PLANTS
種 - 芽 - 茎 - 花 - 枯
c. A LIFETIME IS A YEAR
春 - 夏 - 秋 - 冬
d. A LIFETIME IS A DAY
朝 - 昼 - 夜

すなわち、それぞれが、始まりから終わりへのSource-Path-Goalというイメージ・スキーマを有している点である。さらに、新奇なメタファーを作ってみると、(13)のようなものも浮かぶ。

(13) 君もそろそろ人生のコーナーを回って直線に差し掛かっているからこの辺でスパートしないとな。
この場合は、(14)のようなモト領域が想定できる。

(14) スタート - コーナー - 直線 - ゴール
いずれにせよ、Source-Path-Goalのような構造をもっている領域であれば、多くが人生のメタファーを作りうると考えられる。つまり、ISは写像されるのみならず、IS

を動機づけとするメタファーが存在するといっていよう。

双子の赤字、ツイン・タワー

「双子の赤字」などの表現もまさにISによる構造的類似性と考えることができる。双子と赤字の間には、共起的経験は存在しない。そこにあるのは、参与者数が2であること、およびその2つの参与者が相同的であるという構造的類似性である。

力動的相同性

FORCEもJohnson(1987)のリストにはISの一種として取り上げられているが、(15)に見るようにFORCEは五感に転移する²。

(15) 強い匂い, 強い味, 強い音, 強い光, 強い色

このような場合、異なる領域に写像することはたやすい。抽象的な領域でも、(16)のような発話が可能である。

(16) 僕は現実の重さに押しつぶされようとしていた。
これもFORCEのISを動機づけとした比喻の一例と考えることができる。一般にISは定義からしても多感覚をわたっている。多感覚にわたるISは、異なる領域をつなぎ安いが想像できる。

4.6 ISと身体性

身体的経験とISに関してJohnson(ibid: 33)に短いながら興味深い記述がある。

I believe that our sense of our orientation is most intimately tied to our experience of our own bodily orientation. Our body can be the trajectory, as in “Paul walked out of the tunnel,” or it can be the landmark, as in “She shoveled the potatoes into her mouth.”

すなわち、容器と中身の関係の経験としては、箱にボー

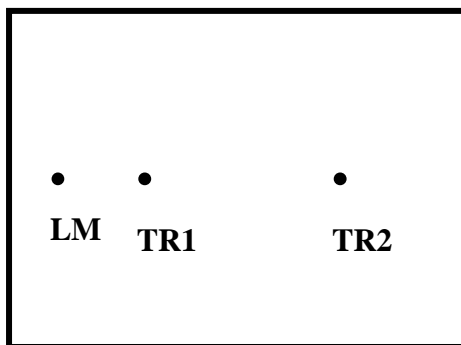
² 触覚における触れるという要素は、刺激が感覚器官に触れるという意味で、他の感覚(味覚、嗅覚、聴覚、視覚)にも含まれる(山梨 個人談.)

ルを入れる、といった操作(これにも視覚と身体運動が関わる)の経験以外に、自分が中身となって容器の中に入る経験 (17a)、および、自分が容器となって、身体に何かを取り入れる経験(17b)も含まれるということである。

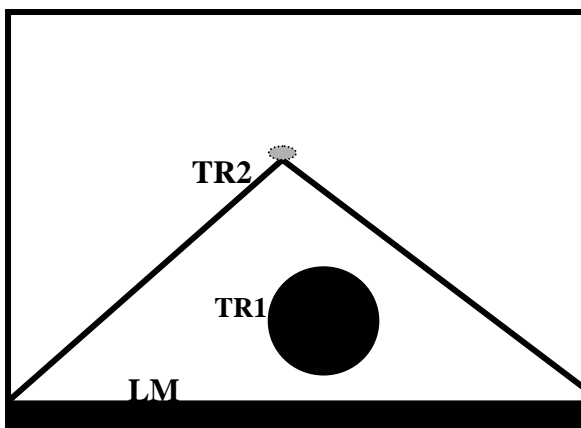
(17) a. 私は部屋の中に入った

b. 私はチキンを丸ごとお腹の中に収めた。

イメージ・スキーマが単なる視覚的構造だけでなく、複数の感覚にまたがることはすでに見たが、主体がLMまたはTRとなる例を、<遠近>というイメージ・スキーマから例示する。



客観的視点



LMに主体が入った主観的視点

このように主体がLMに合成されるとイメージ・スキーマの感覚的側面が強調される。

近

大きい

濃い

きめが粗い

下

移動が大きい

移動が速い

触覚、嗅覚、聴覚

などでも感じられる

遠

小さい

薄い

きめが細かい

上

移動が小さい

移動が遅い

触覚、嗅覚、聴覚

などでは感じられない

すなわち、さまざまな軸が遠近と連動していることがわかる。例えば、何かが遠くから主体に向かってくるような場合を考えてみると、以下のような現象が起こる。

(18) a. 大きくなる

b. 濃くなる

c. 下に来る

d. 強くなる

e. 早くなる

f. 他の感覚 (聴覚、触覚、嗅覚など) の共起

遠いということを連想させる言語表現もさまざまな形で存在することがわかる。

(19) a. うっすらと見える

b. 小さく見える

c. 僅かに見える

d. 微かに見える

以上、容器のISの例、遠近のISの例から、ISが単なる抽象概念でなく、身体的経験を経て形成されることを考察した。また、客観的な視点にくらべ、主観的な視点では、さまざまな感覚要件の連動性が観察できることを指摘した。

5. 価値的類似性を動機づけとするメタファー

(20) どうして同じようなパンチ 何度もくらっちゃうんだ?

宇多田ヒカル 「Sakura ドロップス」

(21) 雨の日のためにな、貯金しとんのやんか。

ある関大生

5.1 価値評価とはどういうことか

価値評価は、しばしば、価値 (*value*), 判断 (*judgment*), 評価 (*evaluation*) などと呼ばれる。価値評価の性質に関しては西尾 (1988) の記述を参考にし、本稿では、「しかも」を使ったテストを開発した。「しかも」に関して、森田 (1980) では (22) のように記述されている。

(22) (共存可能な事柄であれば) 特徴的状态の累加となる。
(累加を表す場合) 二つの状態・状況を重ね合わせることによって “...であって、その上さらに・・・だ”、“それだけでなく、その上” の意となる。

(森田 1980)

「共存可能」な累加は極めれば価値評価の同一性となる。すなわち、「A しかも B」というパターンにおいて、A と B の価値評価が同じ、または、ニュートラルであれば、「しかも」でつなぐことができるが、A と B が固有の価値評価を持ち、しかもそれが対立する場合、非常に不自然な発話となる。

(23) 言語学者で しかも引きこもり
(0) (-) (-)

(24) 言語学者で しかも高給取り
(0) (+) (+)

(25) ?? 美人で しかも引きこもり
(+) (-)

(26) OK 美人で しかも高給取り
(+) (+)

(27) OK オタクで しかも引きこもり
(-) (-)

(28) ?? オタクで しかも高給取り
(-) (+)

(29) 40 代で しかも子連れ
(0) (-) (-)

(30) 40 代で しかも(乗ってる車は)BMW
(0) (+) (+)

(31) ?? お茶の師範で、しかも子連れ
(+) (-)

(32) OK お茶の師範で、しかも(乗ってる車は)BMW

(+) (+)

(33) OK ジジババ付きで、 しかも子連れ

(-) (-)

(34) ?? ジジババ付きで、 しかも(乗ってる車は)BMW

(-) (+)

5.2 経験的モラル

Lakoff (1996) には、経験的モラルとして、モラルの両いいのモト領域となる経験の領域を挙げている。これらモト領域の用語はすでにさまざまな領域での傾向的価値評価を含んでいると言える。

- (35) a. healthy <> sick
b. rich <> poor
c. strong <> weak
d. free <> imprisoned
e. cared for <> uncared for
f. happy <> sad
g. whole <> lacking
h. clean <> filthy
i. beautiful <> ugly
j. bright <> dark
k. close social ties <> hostile or isolated

5.3 日本語のモラル・メタファー

鍋島 (2001) では、モラルに関する日本語のメタファーとして、モト領域の種類を 4 つに分類しているが、これらの領域においても大半が価値評価を含んでいる。

きれいな<>汚れたの群

(36) 白い<>黒い クロ、灰色高官、黒い霧、身の潔白

(37) 純粋な<>不純な 不純な動機

(38) 綺麗な<>汚れた 手を汚す、汚職事件、無垢な

(39) 清潔な<>不潔な 不潔な行為、クリーンな政治家

高い<>低いの群

(40) 高い <> 低い モラルが低い、志が低い、高潔

(41) 昇る <> 落ちる 墮落する、墮ちる、滑り落ちる

(42) 整った<>崩れた モラルの崩壊

整った<>乱れたの群 標準形、理想形、正しい形

- (43) 整った<>乱れた モラルの乱れ、風紀が乱れる
- (44) 整った<>欠けた モラルの欠如
- (45) 整った<>歪んだ モラルの歪み、政治の歪み
- (46) 新鮮な<>腐った 政治の腐敗、テレビ局の腐敗
- (47) 健康な<>病んだ 病んだ政治

真っ直ぐな<>曲がったの群

- (48) 真っ直ぐな<>曲がった 曲がったことが大嫌い
- (49) 真っ直ぐな<>ねじれた 真実を捻じ曲げる
- (50) 真っ直ぐな<>外れた 道を外れる
- (51) 縦<>横 横槍、横恋慕、邪(よこしま)な

5.4 「問題」のメタファー

問題の概念化には以下のようなものが挙げられる。

問題は敵対者である

- (52) 問題と戦う
- (53) 問題に悩まされる
- (54) 問題にてこずる
- (55) 問題が手に負えない
- (56) 問題に付きまといわれる
- (57) 問題を(未然に)防ぐ
- (58) 問題と取り組む
- (59) 問題に取り組む

問題は重荷である

- (60) 問題を抱える
- (61) 問題を背負う
- (62) 問題を引きずる

問題は障害物である

- (63) 問題にぶつかる
- (64) 問題を乗り越える
- (65) 問題を回避する

しかし、障害物、重荷、敵などのモト領域は問題に限らず、貧困、死、病、弾圧など、マイナスの価値評価を持った概念に比喩的に用いられる。

- (66) 貧困と戦う
- (67) 死に脅かされる

(68) 病を背負う

(69) 弾圧を乗り越える

5.5 存在の多重性と価値評価を基盤としたメタファー

ここまで、価値評価の方向が同じ場合、多くの概念が相互的にメタファーを形成しやすいことを見てきたが、特に身体に関わる危害はメタファーを作りやすい(Lakoff, 1996 など)。

- (70) 身体的自己 / 精神的自己 / 経済的自己 / 社会的自己
- (71) 死 / 精神的死 / 経済的死 / 社会的死
- (72) 精神的ダメージ / 経済的ダメージ / 社会的ダメージ
- (73) 打撃 / 精神的打撃 / 経済的打撃 / 社会的打撃
- (74) あのパンチは痛かった(社会的な打撃)
- (75) あの言葉は痛かった(心理的な打撃)
- (76) あの出費は痛かった(経済的な打撃)
- (77) あの失言は痛かった(社会的な打撃)

害を与える潜在性

実際に危害がある場合だけでなく、危害の潜在性を表す多数の複雑な概念がメタファーを容易に形成する。

- (78) 毒のある言葉
- (79) 刺のある言葉
- (80) 針のような言葉
- (81) She can cut you like a knife.
- (82) 会議に爆弾を持ち込んだ。
- (83)は Glucksberg & Keysar (1993)の例であるが、ここあるのは、「嫌な感じ」に基づく価値的類似性であると言える。
- (83) My job is a jail.

6. まとめ

本稿では、認知言語学の枠組みに基づいたメタファー研究における身体性を取り上げた。メタファーの存在の基盤となる動機づけに関しては、従来、二領域の共起的経験である経験的基盤(共起性に基づくメトニミー的認知)のみが認められてきたが、本稿では、これに加えて、

イメージ・スキーマなどの構造的類似性、および価値評価の方向の同一性が動機づけになりえることを考察した。さらに、両者の場合にも身体性が重要な役割を示していることを主張した。

主要参考文献

- Clausner, Timothy and William Croft. 1999. Domains and image schemas. *Cognitive Linguistics* 10-1, pp. 1-31.
- Fillmore, Charles. 1982. Frame semantics. In The Linguistic Society of Korea ed., *Linguistics in the morning calm*. Seoul: Hanshin Publishing.
- Fillmore, Charles and Beryl T. Atkins. 1992. Toward a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbor. In Lehrer, Adrienne and Eva Feder Kittay eds., *Frame, fields, and contrasts: New essays in semantic and lexical organization*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gibbs, Raymond W. Jr. and Herbert L. Colston. 1995. The cognitive psychological reality of image schemas and their transformations. *Cognitive Linguistics* 6-4, 347-378.
- Glucksberg, Sam and Boaz Keysar. 1993. How metaphors work. In Ortony, A ed. *Metaphor and thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grady, Joe. 1997. THEORIES ARE BUILDINGS revisited. *Cognitive Linguistics* 8(4), 267-290.
- Grady, Joe. 1997. Foundations of meaning: primary metaphors and primary scenes. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Grady, Joe. 1999. A typology of motivation for conceptual metaphor: correlation vs. resemblance. In Gibbs, R. and G. Steen, eds, *Metaphor in cognitive linguistics*. Philadelphia: John Benjamins.
- Grady, Joe, Sarah Taub, and Pamela Morgan. 1996. Primitive and compound metaphors. In Goldberg ed. *Conceptual structure, discourse and language*. Stanford: CSLI publications.
- Johnson, Mark. 1987. *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- 河上哲作 編著 1996. 『認知言語学の基礎』研究社出版
- 河上哲作・谷口一美 近刊. 『認知意味論の新展開: メタファーとメトニミー』(英語学モノグラフシリーズ第20巻)研究社出版
- Kovecses, Zoltan. 2002. *Metaphor: A practical introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- 楠見 孝 1990. 「比喩理解の構造」 芳賀 純・子安増生(編) 『メタファーの心理学』誠信書房
- 楠見 孝 1992. 「比喩の生成・理解と意味構造」 箱田裕司(編) 『認知科学のフロンティア II』サイエンス社
- 楠見孝. 2002. 「類似性と近接性: 人間の認知の特徴について」 『人工知能学会誌』 17 巻 1 号.
- 楠見 孝・松原 仁 1993. 「認知心理学におけるアナロジー研究」 『情報処理』 34 (5).
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦、河上哲作他訳 『認知意味論—言語から見た人間の心』, 紀伊国屋書店, 1993 年
- Lakoff, George. 1990. The Invariance hypothesis: Is abstract reason based on image schemas? *Cognitive Linguistics* 1, 39-74. (杉本孝司訳 「不変性仮説—抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか?」 坂原茂編 『認知言語学の発展』, ひつじ書房, 2000 年)

- Lakoff, George. 1993. The contemporary theory of metaphor. In Ortony, A ed. *Metaphor and thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George. 1996. *Moral politics. -What conservatives know and liberals don't.* Chicago: The University of Chicago Press. (小林良彰・鍋島弘治朗訳 1998. 『比喩によるモラルと政治』木鐸社)
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the flesh*. New York: Basic Books
- Lakoff, George and Mark Turner. 1989. *More than cool reason: a field guide to poetic metaphor*. Chicago: University of Chicago Press. (大堀俊夫訳 『詩と認知』, 紀伊国屋書店, 1994 年)
- Langacker, Ronald 1987. *Foundations of cognitive grammar. Vol. 1: Theoretical prerequisites*. Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- 初山洋介 1997 「慣用句の体系的分類 - 隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に - 『名古屋大学国語国文学』第 80 号
- 森雄一 2002. 「隠喩は二重の提喩か?」『成蹊大学文学部紀要』第 37 号
- 森田良行. 1980. 『基礎日本語 2』角川書店
- 鍋島弘治朗 2001. 「『悪に手を染める』 - 比喩的に価値領域を形成する諸概念」『大阪大学言語文化学 10』
- 鍋島弘治朗 2002. 「Generic is Specific はメタファーか - 慣用句の理解モデルによる検証」『Proceedings of the 2nd JCLA Annual Meeting』認知言語学会
- 鍋島弘治朗 (予定). 「領域を結ぶのは何か - メタファー理論における価値的類似性と構造的類似性」『Proceedings of the 3rd JCLA Annual Meeting』認知言語学会
- メタファー
- 鍋島弘治朗 2000. 「水の比喩 - 日本語の比喩研究における方法論に関する一考察 - 」日本言語学会 120 回大会口頭発表
- 西尾寅弥 1988. 『現代語彙の研究』明治書院
- Nomura, Masahiro. 1996. "The ubiquity of the fluid metaphor in Japanese: a case study", *Poetica*, 46.
- 野村益寛 2002. 「<液体>としての言葉：日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐる」大堀壽夫編『認知言語学 II：カテゴリー化』東京大学出版会
- 佐藤信夫 1978. 『レトリック感覚』講談社学術文庫
- 瀬戸賢一 1995. 『空間のレトリック』海鳴社
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版